

講演

## 日本軍による上海での罪行と統治

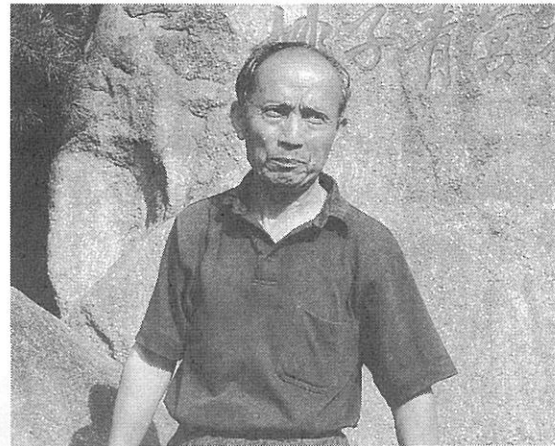
(抄訳)

張大衛

上海淞滬抗戦記念館

日本の友人の皆さん、こんにちは。日中戦争が終わって既に 60 年以上が経ちました。戦争の硝煙は既に消失し、今では平和と発展が歴史の主題となっています。今日、私の心情は大変複雑です。日本軍国主義者による中国に対する侵略、虐殺、略奪などの罪行を心の底から恨む心情と、もう一方では、皆さんが歴史を尊重し、日中戦争における被害状況を日本の皆さんに紹介するために私たちを招いてくださったことに対する感謝の気持ちを抱いております。私は皆さんに 30 年代、2 度にわたる淞滬戦争における上海の被害状況を簡単にご紹介したいと思います。

20 世紀に入った上海は、その地理的位置と特殊な政治状況から、膨大な人材が集積されて、広大な移民都市となりました。大量の資金が上海に流入し、大量の物資が集積され、近代化された商業、貿易、金融、工業、交通、市政、教育、文化事業、サービス業などが急速に発展していきました。20 世紀の 30 年代初頭、即ち日中戦争の前、上海はすでに近代的発展を成し遂げ、世界が注目するところとなっていました。中国で最も近代化された都市にして、ニューヨーク、ロンドンなどに継ぐ世界第 5 位の国際都市として「東洋のパリ」「西方のニューヨーク」



と賞賛されていました。そして、正に上海が発展するその節目の時に、日本帝国主義がこの地に対し「1.28」、「8.13」の二度にわたる侵略を開始したのである。巨大な破壊力によって上海の発展は無惨な打撃を受け、上海人民はこの上ない災難を被るに至ったのです。

今日は三つの方面から、日本軍国主義が上海で犯した残虐な罪行と統治を見てみましょう。

まず、日本軍国主義が中国でファッショ統治をうち立て、侵略的な略奪を行うために、上海を武装侵略する過程で行った極悪非道な罪行について見てみましょう。それは「放火、爆撃、殺戮、姦淫、略奪」という五つのことばで表せるでしょう。

日本軍国主義者は上海に対する武装侵略の過程で、無辜の市民や非軍事施設に対する大規

模な爆撃を行いました。大量の飛行機を動員し、非軍事目標や居住地域に対する無差別爆撃を行うと共に、毒ガス、細菌を散布して、爆撃だけではカバーし切れない一帯をも破壊しようとしたのである。こうした徹底した破壊は、都市部はもとより、広大な農村部や周辺地域にも及び、工場、学校、病院、民家や各種の公共設備が破壊され、難民もまた例外ではありませんでした。1932年の「1.18戦争」では上海戦区にある建物の7～80%が日本軍の爆撃に晒され、特に閘北、呉淞、江湾の被害が最も甚大でした。1937年の「8.13戦争」によって被災地域は更に拡大しています。

飛行機による爆撃はまた日本軍の地上部隊に呼応するものでした。地上部隊の侵攻に際し、爆撃で建物を破壊して、中国軍が隠れる場所を無くし、歩兵の前進を支援するためです。日本軍による上海や周辺地域に対する集中した無差別爆撃によって、上海人民の生命、財産は徹底した破壊を受けました。当時日本軍が爆撃した跡を今も見ることができます。

日本軍国主義者は中国侵略に際し、人類史でも類を見ない残虐な殺戮を行っています。人口が密集した国際都市・上海も例外ではありません。数千、数万に及ぶ無辜の一般民や非戦闘員が虐殺されました。今日、この会場にお見えの王雲テイさんと沈永良さんは正に当時の虐殺を体験した目撃者であり、被害者に他なりません。彼らの家族は日本軍に殺されています。王さんの故郷・宝山区、沈さんの故郷・金山県は共に日本軍による虐殺被害を最も被った地域の一つです。

今日、私は二冊の本を持参してきました。日本軍が宝山、金山地域を占領した後に行った血生臭い虐殺の数々を記録したものです。日本軍

は一路南京に向かう道すがら、蘇州、無錫、常州、句容、鎮江などで血生臭い虐殺を行ってきました。南京大虐殺は正に上海から始まったと言えるでしょう。

「1.28」「8.13」戦争において、上海市民の被害はどれくらいのものであったのか、それは集計し得ないほど巨大なものであったのです。射殺、刺殺、生き埋め・・・さらには生皮を剥ぐ、目を抉る・・・など、その虐殺方法は列挙のいとまありません。加えて、無数の集団虐殺があります。かつて、上海郊外では「無人村」や「無人郷」が出現しました。今も当時日本軍が集団虐殺を行った多くの地に「殺人池」「殺人溝」の遺跡が残っています。

侵略戦争の過程で行われた姦淫（＝性暴力）は、日本軍の獣性を表すばかりか、日本軍の侵略精神を支える為の重要な手段とも言えます。彼らは村でも、都市でも、室内でも、屋外でも、夜でも、昼間でも・・・場所と時間を問わずに強姦をくり返しました。また、その対象も若い女性は言うに及ばず、老女や幼女に及んでいます。集団での輪姦や、強姦後も写真を撮ったりして彼女たちを辱め、強姦後に虐殺することも希ではありませんでした。その淫行の方法も残忍かつ変質的で、口に出すことさえ憚れるほどです。姦淫は侵略日本軍の非道性、残虐性を表す最も確かな証拠でもあります。

当時の日本軍は正真正銘の“強盗部隊”でもありました。彼らは焼く、殺す、犯す、を欲いままにしたばかりか、占領区で欲いままの略奪も行っています。軍当局による“公的”かつ組織的な略奪以外にも、兵士個人、個人が勝手気ままにものを奪い、私腹を肥やしていました。

「焼き殺す、殺し尽くす、奪い尽くす」は正に侵略日本軍の強盗的性格を最もよく表すことば

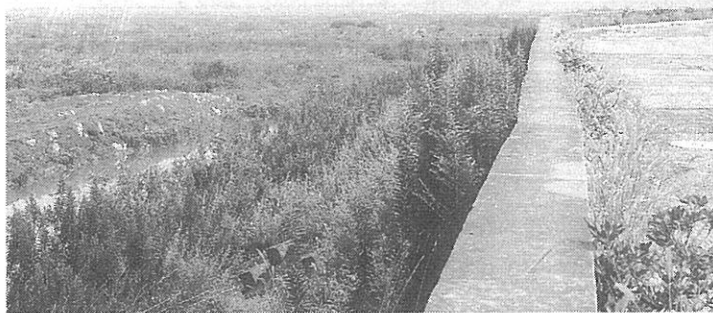
であり、また、彼らの罪行の数々を表す最も重要な要素でした。

もう一つの側面を見てみましょう。即ち、日本軍が上海を占領した後、全中国を侵略する目的で樹立したファッショ統治についてです。

「8.13」戦争が終結した後、日本軍国主義者は「華（\*中国）を以て華を制する」政策を押し進めました。偽政権を押し立てて、漢奸（\*民族裏切り者）に傀儡ファッショ統治をさせたのです。こうした偽政権は飾り物に過ぎない虚構の政権でした。統治権は日本軍国主義の手中にしっかりと握られていました。日本軍国主義者による侵略的な統治形式に過ぎません。それ故、偽政権が犯した罪悪の根源は日本の軍国主義にあり、中国侵略における罪行の一構成部分といえます。

> 農村に対する支配と統治をより強固なものにするため日本と偽政権は長期にわたって上海郊外の農村に対し「清郷（\*掃討）」を推進し、上海都市部での統治の安定を図りました。

日本軍国主義の占領区に対する統治は、侵略



日本軍が上陸した揚子江岸、小川沙  
(2004年9月18日 撮影)

戦争の産物であると同時に、直接的に侵略戦争に奉仕するものです。この様な統治は必然的にファッショ統治以外になく、経済の発展、社会の発展など、あらゆる事業の発展に対し巨大な破壊力となります。彼らは上海占領区でファッショ統治を実施しました。橋、駅、埠頭など全市の交通要所に銃を持った日本兵が配備され、全市が日本軍が監視する一大牢獄となったのです。日本軍が歩哨に立つところを通るとき、誰であれ自己の尊厳、国家の尊厳を維持することができず、日本兵に対し帽子を脱いで深々とお辞儀をしなければなりません。電車が橋を通るときも一旦停車して日本軍の検査を受けねばならず、許可を受けてようやく通行できるのです。もし違反でもあろうものなら軽くても跪かされて殴られるか、重いときには殺されることもあったのです。こうした植民地軍事統治以外にも、日本軍は多くの秘密特務を使って、四六時中市民の日常を監視していました。街のヤクザや漢奸を使い、郵便物の検閲、電話の盗聴、公共場所の監視を行いました。抗日活動を行う者や嫌疑者がいればすぐさま憲兵隊が駆けつけて逮捕

しました。侵略者の本能とでも言うのか、逮捕はほとんど夜間に行われ、いったい何人が逮捕され、誰が、何の容疑で逮捕されたのかも公布されることがなく、外界の人々には知らされることがなかったのです。逮捕された者が厳しい拷問に晒されたのは言うに及ばず、そのほとんどが二度と生きて戻ることはありませんでした。

上海市民に対する統治をより強固なものにするため、日本軍国主義は全市で「保甲制度」を復活

させました。市民には「良民証」を持たせ、それを持たない者は捕まえられました。日本と偽政権の警務官はいつでも自由に家宅捜査ができたのです。

上海における日本軍による略奪は、その質、量共に際限のないものでした。例えば、上海における重要物資の統制は1938年12月3日に開始されています。派遣軍特務部は上海特別市政府に対し、鋼材、特殊鋼材、銅、鉛、亜鉛、鉄鉱、機械類、麻、綿花、皮革などの日本軍占領地から「上海方面への移動」の“停止”を通告しました。

1941年9月、日本軍当局は物資統制の範囲を拡大し、更に上海周辺地域に経済封鎖監視所を設け、偽政府の警官と日本の憲兵隊が協同して昼夜を問わず出入りする物資の検査を行いました。上海地区の統制範囲は日本の上海憲兵隊が独自に規定したのです。太平洋戦争勃発後、日本軍国主義は戦争を拡大し、物資の欠乏に悩まされていました。統制範囲はますます拡大されていきました。1942年3月27日、上海方面大日本帝国陸海空最高指揮官は布告を発令し、鉄鋼、非鉄金属、鉱石、綿花及び綿製品、羊毛製品、麻及び麻製品、皮革、木材、鉱油、石炭、木炭、工業薬品、顔料、樹脂、医薬品、医薬材料、機械と付属品、米、小麦などの食料品、鉄桶、紙など18種類の物資を統制物資とし、1942年4月1日から、無許可による移動を禁じました。ここで言う「統制」とは、実際には略奪に他ならなかったのです。統制物資の範囲拡大は占領地に対する物資略奪の強化に他ならず、それ故に、上海人民の生活はこの上ない窮乏を強いられる結果となったのです。

日本侵略者の略奪は残忍を極めていました。

例えば、日本・偽政権は様々な名目の税金や供出金を課すことで上海市民を搾取しました。その数は地方税、供出金だけで56種に及ぶものでした。1943年1月以降に新設された税金、供出金だけで25種(45%)に及んでいます。その税金や供出金の名目は荒唐無稽で、例えば毎月2~50元の「電話供出金」を徴収しながら、同時に毎月2~50元の「電話税」を徴収する、10%の「迷信事業物品取締り供出金」を取りながら同時に「お香蠟燭税」を徴収する、10%の「宴席供出金」、「娯楽供出金」、「宿泊、飲食税」など、数挙にいとまがないくらいです。

太平洋戦争の後期、日本侵略者の敗勢が日増しに明らかになってくると、上海に対する収奪は一層過酷を極めるようになりました。1944年、恒豊紡績工場や多くの外国企業の紡績企業の機械類がすべて略奪され、南市の環城電車の軌道や鋼柱など、数千トンに及ぶ鋼材が尽く略奪され、軍用に供されました。それでもならず、ついには公共租界にある金融機関の28の鉄扉までが取り外され、鉄製の道路標識までが略奪されていたのです。ありとあらゆる金属製品が「聖戦に供する」羽目になったのです。

上海の外国企業を含めたあらゆる企業が「軍用」に転換させられ、それ以外のあらゆる機械設備、鉄材が軍用に供されていきました。強大な上海工業はこうして壊滅的な打撃を被ったのです。  
(通訳 墨面)